

意 解 鹿の囲い

もの寂しい山には人の姿は見えないが、この静かな小亭に座していると、人の話し声だけがかすかに聞こえてくる。（静かにのんびりと日を暮し、やがて夕暮れを迎える）すると夕陽の照り返しがこの奥深い林の中にまでさし込んできて、みずみずしく青々とした苔の上を照らし始める。

返景について

「景」は日の光。「返景」は多くの本に「夕陽の照り返し」とある。「西から延びる光が地上にあたって周囲を照らす光」というのもある。今一つ具象しきれない。「唐詩鑑賞辞典」（東京堂出版）には「要するに暮れ方の淡い光のことである」と結論づけ、さらに鑑賞欄に「夕暮れの陽光は赤味を帯び、地上のすべての物の色は日中とまったくちがってくる。いつもは光のとどかない木の下陰に密生した苔の青さが、えもいわれぬ美しさでうかびあかってくる。」と解説している。これなら状況が鮮明になる。やはり直射の光ではなく、地上からの照り返しが淡い光となって奥深い林の中に入りこんでいるのであろう。王維の感覚のこまやかさを感じる。

この詩の作られた「輞川荘」とはどんなところ

初唐の詩人宋之問しもんの別荘であつたものを王維が

悠久の名作シリーズ（20）

『鹿 柴』 王 維

どんな人も自然にあこがれ
いつかは自然の中に帰りたい

空山不見人 空山人を見ず

但聞人語響 但人語の響きを聞くのみ

返景入深林 返景深林に入り

復照青苔上 復照らす青苔の上

四十二・三歳ころ買
い取った。長安か
ら数十キロメート
ル南東の、藍田の
地にある。そこ
は輞川の溪谷が流
れ、別荘はやや谷
が開ける辺りに設
けられている。別
荘といっても、今



日イメージする、輕井沢や伊豆などの規模の小さいものではない。甲子園球場を十いくつも合わせたほどもあると言った人がいたが、とにかく広い。その敷地の中には、農田・菜園・果樹園・花園・牧草地・山林・沼や沢・中州そして舟を浮かべることのできる小川まで流れている。また建物も風雅で、亭閣が連なり、農作業用の倉庫や使用人の宿舎も完備している。そして風光の良いところには東屋風の休息所がある。耕地は広く、そこから私租を徴収するので、経済的に豊かである。一つの村がその領域と考えれば妥当であろう。王維はこの別荘を、急流が車輪のようにうずを巻いて流れているところから「輞川荘」と命名した。この広大な敷地には、数十メートルあるいは数百メートル隔たりながら二十の名所がある。すなわち孟城坳・華子岡・文

杏館・斤竹嶺・鹿柴・木蘭柴・竹里館……などである。王維は任務のない日々には一人この別荘に入り、香を焚きながら詩を謡い、墨絵を描き、琴を弾き、また知己のひとと語りつつ、静かに時を過ごした。晩年仏教に帰依した彼は死を前にしてこの壮大な別荘をすべて寺に寄進したと伝えられている。

静中動あり・動中静ありの名閑寂詩

「鹿柴」は鹿を飼っておく木の柵。「輞川荘の一部にこうした放牧場があった。その周囲は小高い丘になっている。農作業をしている人なのか、静かな中にわずかに話し声だけが聞こえる。ほかに音のするものはなにもない。この静かさの表現が至高といわれている。つまり「空山人を見ず」の「静」に対して「人語の響き」の「動」を並べながら無限の「静」を表現する。芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」の静寂さに通ずる手法である。また転結句でも「夕陽が苔を照らす」という「動」に対し「青々と何年もわずかに生き続ける



●李杜王と併称される盛唐の詩人。
仏教に帰依し、自然を愛した自然派の代表。詩仏。

苔」を「静」としてとらえている。しかもその「静」と「動」は凡人には感じられないほどのわずかなものである。この二つの中に我々は自然が生み出す無限の閑寂さに引き込まれるのである。

さらに南宋の詩人蘇軾は特にこの詩を取り上げて、「摩詰（王維のこと）の詩を味わえば、詩中に画有り。摩詰の画を観れば、画中に詩あり」と評したことも有名な話である。

輞川荘での詩の紹介

教本 A 54にある「竹里館」はもちろんその代表であるが、あまりにも有名なので別の詩を紹介しよう。

孟城坳（もうじょうおう）

新家孟城口 新に家す孟城の口

古木餘衰柳 古木衰柳を餘す

来者復爲誰 来者は復た誰と爲す

空悲昔人有 空しく悲しむ昔人の有なりしを

坳…くぼみ 有…所有する

意解

新しい家を孟城の入り口近くに建てた。古木の中に衰え

七〇一	1	山西省太原に生まれる。（一説に六九九年うまれ）
七〇九	9	辞（韻文の一体）を作る。
七二五	12	この頃長安に遊学する。
七二七	17	「九月九日憶山東兄弟」
七二二	21	進士に及第、大樂丞（音楽官）になるが済州に左遷される。
七三〇	30	この頃妻と死別、以後は独身で過ごす。
七三四	34	右拾遺（天子の諫官）となる。
七三七	37	監察御史（裁判刑罰を司る官）となり涼州に「使至塞上」
七四一	41	長安に帰る。
七四二	42	左補闕（天子の諫官）から庫部郎中（武器庁次官）になる。
七五二	52	文部郎中（文部次官）になる。
七五五	55	安祿山の乱起こる。
七五六	56	賊軍に捕らえられる。肅宗即位。
七五八	58	中書舍人（宮中文書係）から給事中（詔勅担当官）に再任。
七五九	59	尚書右丞（内閣書記官長）となる。
七六一	61	病により没する

た柳がまだ残って何とか生きている。（その木もやがて朽ち果てるだろうが、そのように私もいつまでもここに住み続けるわけではない）将来ここに住まいする人は誰であろう、その人から「この別荘は誰か昔の人が所有していたのだ」と思われるようになるのがなんだか悲しい。